白峰三山　～北岳から間ノ岳そして農鳥岳へ

Macchan90

南アで登り残しの北岳と間ノ岳を如何様に登るのか、それを考えるのに何度地図を眺めたことか。

積雪期に纏めて登るというのも些か芸が無い気がする、さりとて沢登りでかつてのクラシックという荒川北沢を採って北岳に登頂を果たすのも沢自体に興味が持てない点からどうにも乗り気がしない。間ノ岳なら大井川源流東股から農鳥沢に繋ぐのが浪漫の点からも好ましいが如何せん内容が無さ過ぎる嫌いがある。

ううむ。

それを思うと昨年実践の三峰川から仙丈岳への山行が如何にも印象好く残っており、あの雰囲気と感触とを再度得たい思いがあってこの時期を逃すまい、本山行を敢行した。

6/15 まではバスは歌宿まで、問い合わせのバスセンターオバちゃん「この時期ですと週末とは言えお客さんも少ないですから」そりゃ願ったり叶ったりだ。広河原、いや北沢峠まででも乗せてもらえりゃ勿論嬉しいが、そんなバス運行を待つとなると今度は人が入り込む、痛し痒しで折衷して“多少楽して人居ない”このタイミングで臨んだ。

この季節二度めの好天周期が巡ってきてもう我慢ならず、前日に事務方に配慮無い社長とイザコザあって「もう好きにさしてまいますわ」ここを先途と(捨て)科白吐きつ月曜までの休暇を取得し、雪山でも沢でもないのでパッキングも早く(ザック重量は 12.2kg+酒、体重 55.5kg)、家内は笑顔で了承呉れて昨年同様スッキリと発つ。

【5/27】(快晴)　三時起床で発つ。仙流荘に行くなど初めてのことで、今回は 6:05 発のバスに間に合うかどうかの時間読みも立たず、ラジヲで掛かる「特集／美空ひばり幻のインタビュー」に耳を傾けつつままスピード出して走る。松川辺りでは右手に顕著な形の北岳を確認した。スマートに仙流荘 5:40 着、6:05 発のバスに乗車でけた。歌宿まで手荷物料金込みで 1040 円也。下車してジャンジャカ歩くも荷の軽い兄ちゃん共には勝てない、年を取るのも悪くはない。北沢峠の醸す雰囲気は中々で再訪したい、明後日に。小太郎山へ突き上げる扇沢も確認したがショボクレた渓相で意欲は湧かなかった。ツッたか歩いて誰も居ない広河原、パン齧って当然のように大樺沢をズンズン詰めるも荒療治が過ぎた様で沢コースのルートが不明瞭になるに従い登高意欲も減退して二俣まででハヒハヒになる。オマケにここに至って雪渓で沢が閉じ両岸の流れ込みも雪ベッタリで水も採れぬ。よもやアレが最終だったとは。支流で確認を取っておいた水の採れるであろう白根御池小屋へV字戻りし安寧を得る。一人は気ままで良いなや、思ってマッタリしていた矢先に下手より登山者の声がしてあいやいや。挨拶交わせば小屋開きの準備に訪れた従業員の方々七名程でした。鳳凰三山を前に、定番棒ラーメン餅入りをかっ込んで焼酎飲んで低く唸る発電機を子守唄に早々と眠る。北岳肩に上がるまでの急傾斜部分を気に掛けつ案じつつ。

【5/28】(快晴)　3 時に自然起床し 5 時には発つ。小屋上手の雪の斜面をまずは順当に登高してゆく。アイゼンもピッケルも無い中で登高してゆくこのドキドキ感と言ったら無い。イザとなりゃ欠けた鋸は持ってきたので木ピッケルを拵える位のことはできる。無い道具ながら知恵と工夫で乗り越えるのだ、とは言え何でも省くのも考えものだ。「草すべり」ルートが時折現れるも登高につれて雪斜面に消え入ってしまう。ダケカンバといよいよ現れ出したハイマツを引っ掴んで上昇、尾根への抜け口でそれらブッシュも掻き消えてあと一歩が雪の斜面で、滑ったら唯では済まぬが落ちなきゃいい。登高中に現れた富士山が背後で応援を呉れている。日射で緩み出した雪面にスパイク地下足袋蹴り込んで、両の手の五本指をピッケルよろしく突き刺して鼻つまみトラバースすること 15m、無事に渡り終えた安堵の様を尾根向こうに突然立ち現れた仙丈岳に見られてしまった。流石は日本第二の高峰とあって、肩からも結構な距離である。ズンタカ雪踏んで絶頂へ。あ、バットレス見下ろすのを忘れた。

感慨もないのはこれから先を思うと「そこどこない(それどころぢゃぁ無いのよ)」からで、間ノ岳到着正午をリミットに農鳥のアタックを考えていた。「俺の農鳥は深田久弥先生が仰るように間ノ岳なのだ」と酸っぱい葡萄話もちゃんと用意して置きつ、それでも小市民である私は甲斐駒と仙丈とオベリスクを背に間ノ岳への歩を進めるのであった。誰も居ないことを不思議に思うも、花も咲かぬこの季節の訪問は些か価値の下がることなのかもしれない。キタダケナンチャラは咲かぬとも、それでも私は静かな今がいい。

シャカリキにならずとも間ノ岳に着いたは着いた、辛うじて 5 分前に。予定の通りに農鳥岳のアタックに出る。気

負わずに。西農鳥で力尽きたら「俺の農鳥は標高高いコッチなのさ」で済む話、それでもやっぱり小市民である私は・・・・。間ノ岳からの下降で雪を拾える部分はジャンジャカ尻で滑り下る。ワークマンのヤッケズボンを履いているので具合がいい。下り出し、丸鑿で削った風の農鳥沢源頭のシュートを見下ろして「嗚呼、やはりこちらも捨て難かったなゃ」山との出合いは一度きり、だからこそ初対面の設定はそれほどに重要事なのだ。が、まあいい。二重山稜を下降するや不意に男が現れた、こんな時に気の利いた科白を吐ける人間になりたいものだがせいぜい言えるのは「あ、こんにちは。今日はどちらから？」奈良田からとのことだがスラリキメキメモンベルマン氏に、Workman縛りで本山行を成そうと息巻く私が問われた言葉は「もしや小屋管の方デスカ？」mont-bell 対 Workman、さて軍配は如何に？　農鳥小屋の名物親父には残念ながら不在で出会うこと無く通過、西農鳥の岩稜は今でこそ他愛ないが積雪期はチョッとした難所かも知れない。西農鳥に立ち、先が見えてきた、噂の冨士アングルも成程の出来である。意識を飛ばして辿り着いたは農鳥岳、特別な感慨も湧かない。ただ、後は来た道を戻りさえすればよいのだとは思った。逆算して間ノ岳着が 17 時半、日が長いとは言え両俣小屋まではどうだろう。山頂からは 2004 年に荒稼ぎした塩見悪沢赤石聖や、双耳峰の笊ヶ岳も遠望された。澤田さんが仰る通りに大町桂月の歌碑が有った。「酒のみて高根の上に吐く息は　ちりて下界のあめとなるらん」来し方を再び辿って間ノ岳へ、鞍部からの標高差 376.3m登り返しを金華山に見立てて登り切るも第二ハヒハヒ期到来でもうこれ以上は動けない。図らずもここにて泊まることとする。即刻ビバーク体制に入り、ちりて下界のあめとなれとばかり焼酎を飲む。桂月は飲んであの岩稜を下ったのだろうか？　昔の日本酒は度数が低かったという。楽しみにした甲府の夜景はガスと風と共に去りぬ。

【5/29】(快晴)　夜中、テントは随分と風に揺すられ煽られ「大丈夫かしらん、破れないかしらん、それともテントごと風と共に持っていかれないかしらん」気を揉む中何時しか寝入り何時しか夜は朝焼け姿で明けてきた。甲府はもとより伊那谷の街明かりも見えた。荘厳なる御来光を拝し、その横に富士の山が鎮座するのは松の字の付く映画のはじまりのようだった。オベリスクの向こうに日光の山々まで望遠された。乾いた風のお陰で濡れていた足袋も地下足袋も乾いた。砂糖たっぷり紅茶飲んで大蒜ラーメンかっ込み、風吹きすさぶ中でのテント撤収が核心だった。なお、ゴミはじめ残置物は一切無しで御暇した。ぐるり山々に挨拶して両俣小屋への下降を開始する。三峰岳への降り口に微妙な一歩有り、また稜線上で乗る雪堤でひとたび滑ろうものなら一挙に大井川水系の人、若しくは野呂川水系の人に成り下がるので気は抜けない。三峰岳山頂 2999mで暫くは吸えないであろう三千mの空気を胸に吸い込み収めて富士山と最後の挨拶を交わして北へ進路を取る。快適な登山道だと思ったのも束の間、雪堤歩きから道に復帰しようと戻ってみてもあいや、ソレが見当たらない。2699 手前だから野呂川越まではまだまだある。13:25 のバス乗車時刻から逆算してデジタル時計が薄い頭に浮かぶもんだから「ええい、右の沢に下っちめぇ！」ここで沢に下降するなぞ十人の登山者が居たらその十人共が「沢へは下っちゃ駄目！」と声を大にして言うのであろうが十一人目の私がその裁可を下した。子供の顔がチラと浮かんだがエエイ、私はこれで生きてきたのだ。間ノ岳への登路の一案として挙げてもいた野呂川源流にも立ち入れる、これ幸いと下降を始めた。陽は当たり出したものの未だ雪面はカキカキで、カンバだのツガの幼木だのを引っ掴んで標高をズンドコ落としてゆく。結局、本流沢床まで尻滑りを許さぬハードボイルドな下降と相なった。無事着いた本流は想像通りに雪崩でカッチンコ、それでも下降するにつれやがて雪渓は割れてよくある沢の風情となる。氷水そのものなので渡渉は最小限、転倒不可、これもスパイク地下足袋 Workman 仕様でなくては通って行けない道であった。両俣小屋着はやっとこさコースタイム通りなので私の沢レベルも大したものではない。カモシカの頭蓋骨を見て唐松の過密幼木林を突っ切って小屋へ到着、いつか再訪したいと思わせる好ましい場所だった。冬期初登した西堀栄三郎や桑原武夫も泊まったという、花咲くこの小屋に。後は頭に空っぽの魔法を掛けて北沢峠までズンズンズンズンズンズンドッコ歩き、原生林の中で昼食の余裕かましてのんびりしてたら時間の余裕が何時しか無くなっており、最後は私の人生を象徴するが如きにハアハア山犬のような駆け込み様で何とか無事 13:25、車上の人となりにけり。そのバスでの復路、行きしに見逃したホテイランをリクエストで林道端に確認し、オマケにシナノコザクラらしきも目に出来て満足顔で 14:00 仙流荘着。ガビガビの足を農業用水でクールダウンし、帰途に就く。安全運転で我が家まで。歩行距離約 55km、体重は思いの外減ってはいなかった。

何なんあ、いや南ア、病みつきになりそう。　　【2017.5.30 記】